

# e-dream-s 通信

No. 119 発行：2011年4月10日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

e-dream-s 通信4月号をお届けします。お楽しみください。

東日本大震災に関してアメリカより寄せられた、四天王寺大学の提携校であるソルトレイクシティコミュニティーカレッジで勤務されており、e-dream-sの活動に協力して下さっている笠井進先生のご投稿も掲載しています。

## 目 次

|                     |       |      |
|---------------------|-------|------|
| 1. 集めること、繋ぐこと、続けること | 中川房代  | P. 2 |
| 2. ホームステイ初日         | 辻 荘一  | p. 3 |
| 3. 震災雑想             | 井川 好二 | p. 5 |
| 4. 《特別寄稿》           |       |      |
| 大震災から学んだ日本の将来       | 笠井 進  | p.12 |
| 5. 生物多様性と会議         | 塚本美紀  | p.16 |
| 6. 転勤               | 山田昌子  | p.17 |



岩手県雫石町丸谷地 小岩井一本桜

# 集めること、繋ぐこと、続けること

中 川 房 代

3月11日の「東日本大震災」から1ヶ月。ちょうど「e-dream-s 通信3月号」の発行直前で、心配になって、東京在住の編集担当の岡田さんと連絡をとろうとしたが、彼女の携帯も自宅の電話も通じなかった。地震で交通機関がストップし、その日は多くの生徒と教員が学校に泊まったのだと、翌朝になってやっと連絡がとれた。

世界各国、各地の個人や団体からの支援活動や応援メッセージが続々と日本に届いている。本当に嬉しく、ありがたいことだと感じている。

カンボジアで再会した Sokhom さん、Ponleu さんからもお見舞いのメールが届いた。カンボジアでも日本の地震のニュースが大きく取り上げられ、多くの大学、企業、テレビ局、団体などが募金活動に取り組み、日本大使館に送っているようだ。また、この通信に原稿を送ってくださったアメリカ在住の笠井先生からは、日本人が中心になってアメリカで募金やチャリティ活動を行っている、という報告が届いた。

大阪に住む私の周りでも、それぞれの団体の枠を超えた活動が行われている。私の勤務する市では全中学校合同での募金活動や、校区の幼稚園・小学校・中学校のPTA&生徒をまとめた活動も続いている。この気持ちや活動を今後も継続的に繋げていければ、と思う。

様々なところで言われているが、私も、震災後、自分に何ができるのか、何をすればいいのか、を考える機会が増えた。そこで大切なのは、集めること、繋ぐこと、続けること、の3つなのではないかと私は思う。震災支援もそうであるが、他の活動にも同じことが言えるではないかと思う。e-dream-s の活動にも。

e-dream-s の活動に、話を移す。

早いもので、カンボジアで開かれた CamTESOL Conference から1ヶ月が過ぎた。3月号の原稿にも少し書いたが、Ponleu さんのお父さんが校長をしている学校への教科書支援のプロジェクトを起ち上げたいと企画中である。Ponleu さんによると、学校では約10種類の教科書を使っているが、英語以外の教科書の教科書は、既にカンボジア政府・教育省から支給され、学校の図書館に配備されているので、生徒はそこから借りて使うことができるらしい。ただ、英語の教科書は支給されておらず、従って、持っていない生徒が多い。

そこで、e-dream-s が、学校図書館に配置する英語の教科書を寄贈するプロジェクトを始めたいと考えている。英語の教科書は1冊50円余り、全校生徒約1,500人を対象にプロジェクトを考えたい。詳細は、今度詰めていくことになるが、是非とも、早く、見える形にしていきたいと思っている。

# ホームステイ初日

辻 莊一

勤務校を含めて3校の高校生 30 人の2週間のホームステイプログラムの付添で、カリフォルニア州サクラメントにほど近いエルクグローブに行ってきた。教師は全部で3人、生徒同様教師もそれぞれホームステイである。

3月19日（金）から4月2日（土）までのカリフォルニア行きが決まった時から、心配はホームステイのこと、特に食べ物である。もちろん贅沢は言わないし何でも食べるが2週間ずっとハンバーグとかピザだとちょっと辛い。ところが、相手のプロフィールを見て大分気が軽くなった。ホストは公立高校の数学の先生 Jennifer Hsiao（30代女性）。ワイン産地として知られる地元 Lodi の出身、イタリア系である。苗字が Hsiao なのは且



Jack と Jennifer

那さんが台湾系中国人の Jack Hsiao だからである。Jack は地元出身ではなく、13歳の時に当時住んでいた韓国から家族と共に移住してきている。地元の大学を卒業し現在は COSTCO に勤めている。さらにプロフィールには二人とも料理が好きだと書いてある。これなら、飯が不味かろうはずはない。この時点でホームステイに関する心配事はほぼ解消である。



サンフランシスコ空港からバスで雨の中を約4時間走り、夕刻ミーティングポイントのエルクグローブ高校に着く。ホストがゲストの名前を書いた紙を持って、雨にも関わらず外で集合している。バスを降りると、コーディネーターの先生方に挨拶したり生徒の点呼を取る暇もあらかばこそ、生徒たちは次々にホストに連れ去られて行ってしまふ。私も、寝覚めでぼーっとしている中、Jack と Jennifer に早く早くと急かされ、気づけば車の中。まあ、これからはアメリカ側のペースで行くしかない。

ホストの二人が急かすのは理由がある。Jennifer の親友の結婚パーティに出席しなければならないからである。私ももちろんそのつもりでスーツを持ってきている。会場近くの Jennifer の実家に着き、ご両親に挨拶をすると、はいここでと部屋をあてがわれ、着替え。途中でノック。はいどうぞと、赤ワインの入ったグラスを渡される。キッチンでは Jennifer のご両親と Jack と Jennifer 4人でワインを飲みながら談笑している。これはいい兆候だ、楽しい滞在になりそうだ、とワインを飲みつつ着替え終わると、スーツケースを積み直して、会場へ出発。行き先は Viaggio というパーティ会場付きのワイナリーである。



会場に案内されるともう宴もたけなわである。寝覚めとはいえ、ぼーっとしている暇はない。腹を決めてニコニコしつつ自己紹介を繰り返しパーティ会場を周遊し、飲み喰い写真を撮りまくる。しばらくして生のジャズバンドの演奏が止まると、両脇に並ぶ兵士6名の間を花嫁花婿が入場する。花婿は最近アフガニスタンから帰国したばかりである。牧師のスピーチ(説教?)、友人、花婿のスピーチ、花嫁と父親、花婿と母親のダンスと続き、最後はDJが入って大ダンス大会である。まだまだ盛り上がっている最中だが、雨風も強くなってきたので早めに帰宅す

ることにする。会場を出ると花嫁花婿の車に友人達が飾り付けをしている。後ろの窓には **Just Kissed!** などと書いている。車で30分ほど走り3LDKほどのアメリカのスタンダードからすれば小さめの家に帰宅して、就寝となった。これが辻荘一55歳、実質上初めてのホームステイの初日である。以降も中身の濃い日々が続くのであるが、その事はまた後日。

# 震災雑想

井川 好二



## 1. 宮城県相馬市松川浦<sup>1</sup>

2011年3月11日に東北地方の太平洋岸と関東地方の一部を襲ったマグニチュード9.0の大地震と、その結果生じた巨大津波の影響が続いている。

1ヵ月近く経った4月8日現在、死者12,787人、行方不明者14,991人、となっている。死者の9割は、津波によると推定される。負傷者は、4,661名で、全国18都道県に設置された2,331カ所の避難所では、154,234人がいまだに避難生活を送っている<sup>2</sup>。宮城県、福島県、岩手県でその被害が大きい。

更に、地震と津波により甚大な被害を受けた東京電力福島第1原子力発電所では、原子炉の格納容器内の圧力を制御できなくなるという事態に陥る。水素爆発や火災が相次ぎ、1号機はメルトダウン<sup>3</sup>、炉心溶融<sup>4</sup>を起こしているとみられる日本の原子力発電史上最悪の事故となった。

近隣市町村への放射能漏れによる住民の避難、農産物の汚染、放射能汚染水の太平洋への排水による海

---

<sup>1</sup><http://www.city.soma.fukushima.jp/kanko/photocon/04.html>

<sup>2</sup><http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20110408-00000643-san-soci>

<sup>3</sup>meltdown |'melt,doun|noun: an accident in a nuclear reactor in which the fuel overheats and melts the reactor core or shielding. (OAD)

<sup>4</sup>原子炉で、炉心の核燃料が融点を超えて溶融する重大事故。メルトダウン。【広辞苑第六版】

水、魚介類の汚染等、事件は収束へ向かう兆しを見せていない。



## 2. 裏磐梯より望む早春の磐梯山<sup>5</sup> (福島県耶麻郡北塩原村)

一方、原発停止に伴い供給力不足に陥った東京電力、東北電力管内で、「計画停電」が行われ被害は広範囲に及ぶ。この状況への対応に関して、政府および東京電力の、リーダーシップの欠如、危機管理システムの不備、情報公開不足などから、被害がより大きくなったとの見方が広がり、両者に対する不満と不信が渦巻いている。

政府の試算によると、この震災、津波、および原発事故などによる被害の総額は、阪神淡路大震災の損失額 9.7 兆円を大きく上回り、最大で 25 兆円に達すると云う<sup>6</sup>。国家予算の全体での規模が、平成 23 年度予算で総体として 92.4 兆円<sup>7</sup>の日本にとって、この一連の天災・人災の被害が、如何に大きな規模であるかが分かる。

この甚大な被害を齎した震災・津波・原発事故の被害者のみなさんへ、出来るだけのことをしたいと思う。NPO 法人 “e-dream-s” としても、出来る限りのことをすべきだと思う。そして、息の長い支援活動が必要だと思う。

勤務先の大学主催のキャンペーンで、被害者へ多少の義援金を出させてもらった。しかし、それで充分とは決して思えない。そこで、“e-dream-s” として、被害者のために、何かをするための心の準備としてこの文章を書いている。何かを始める為の、“e-dream-s” としての出発点の一つなればと思い書いている。

被害を受けた土地と人々に想いを馳せ、より近しいものとして、その復興へ向けて志の輪を広げて行きたい。

<sup>5</sup><http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Mt.Bandai.jpg>

<sup>6</sup><http://www.afpbb.com/article/economy/2792112/6993764>

<sup>7</sup>[http://www.kantei.go.jp/jp/yosan23/point/point\\_05.html](http://www.kantei.go.jp/jp/yosan23/point/point_05.html)

以下、そういうつもりで雑感である。もとより纏まった思索ではない。

.....◎.....◎.....◎.....

関西に住む私にとって、東北はいかにも遠い。

関東には、と云っても主に東京だが、行く機会が多いし、北海道にも何度か出かけたが、東北はすっかり空白になっていて、足を踏み入れたのは、僅かに一度。それも、かなり前である。

私の通っていた高校の修学旅行は当時、選択制になっていて、その時、九州や信州ではなく、福島「裏磐梯<sup>8</sup>」を選んだのは確か、あまり行く機会がないだろうと思ったからに違いない。



3. 旧石巻ハリストス正教会<sup>9</sup> (宮城県石巻市)

司馬遼太郎は「街道をゆく」の「仙台・石巻<sup>10</sup>」編の冒頭、「幸い、大阪から仙台へ直行するYS11<sup>11</sup> (全日空) の便があつて、奥州が近くなっている」(p. 123)と、80年代の半ばに書いている。

YS11は、戦後初めて日本のメーカーが開発したターボプロップ型旅客機で、1965年に就航。全日空では「オリンピア」と云う愛称で呼ばれていた。随分活躍した中型旅客機であったが、国内の民間航空会社からは、最近退役した。

<sup>8</sup>福島県北部、磐梯山北麓一帯の称。桧原ひばら・小野川・秋元の桧原三湖と五色沼湖沼群を中心とする景勝地。【広辞苑第六版】

<sup>9</sup>[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Ishinomaki-Saint\\_John\\_the\\_Apostle\\_Orthodox\\_Church.jpg](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Ishinomaki-Saint_John_the_Apostle_Orthodox_Church.jpg)

<sup>10</sup>司馬遼太郎 (1990)「街道をゆく 26：嵯峨散歩、仙台・石巻」東京：朝日文庫

<sup>11</sup>(Yは「輸送機」、Sは「設計」の頭文字、11はエンジン・機体の設計第1案であったことから)日本が開発したターボ・プロップ式の旅客機。旅客数64人。1962年初飛行。国内定期路線では65年就航、2006年退役【広辞苑第六版】

この震災で、仙台空港は巨大な津波に襲われ、滑走路一帯が水没した。仙台空港がみるみる津波にのみ込まれる様子がテレビで放映され、何度みても呆然としてしまう。ちなみに、来週4月13日より、仙台空港の暫定使用がようやく開始されると云う<sup>12</sup>。



4. 全日空のYS11 (オリンピック)<sup>13</sup>

つくづく、自分はAV<sup>14</sup>、つまりオーディオビジュアルな人間だと思うのは、写真やビデオを見た時のインパクトがよほど大きくて、プリントメディアではなかなかそこまでは伝わってこない。むしろ、写真やビデオのクオリティということもある。質の高いAVは、心によく届く。

この原稿に掲載している写真は、そういう観点から、東北への想いを表すものを、インターネットの各サイトから選んでみた。東北人にとっては、残念ながら失われた風景かも知れないが、私にとっては「未知の過去」。現実には知ることがなく、失われてしまった過去である。

そこで生きた人たちにとっては、慣れ親しんだ景色であろうが、そういう写真から、再生への活力を見つけてみたい。だから、敢えて、震災・津波後の写真は選ばなかった。

<sup>12</sup>[http://www.ana.co.jp/topics/notice\\_sendai/](http://www.ana.co.jp/topics/notice_sendai/)

<sup>13</sup><http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:MyPhotoYS11-2.jpg>

<sup>14</sup>オーディオ - ビジュアル【audio-visual】「視聴覚の」の意。AV【広辞苑第六版】





宮城県から福島県にかけての太平洋岸<sup>15</sup>

最初のページに掲げたのは、福島県相馬市松川浦（写真1）。夜明けの海苔の養殖場である。

以前に紹介した、藤岡(2006)<sup>16</sup>が、「残したい日本の風景」の一つとして、挙げている景色である（pp. 215-220）。藤岡によると、松川浦は、海の「里山<sup>17</sup>」、つまり「里浦」。人間生活と関わりが深い海の自然と云うわけである

青海苔やアサリが名産というが、松川浦は今回の津波で、深刻な被害をうけた。さらに、上記の地図でも明らかなように、松川浦のある福島県相馬市は、東京電力の福島第一原発から近い。原発から排出された放射性廃棄物の影響が充分疑われる地域である。無惨な思いがする。

2つ目の写真は、以前私が修学旅行で行った裏磐梯から臨む早春の磐梯山である（福島県耶麻郡北塩原村）。震源から少し距離があり、太平洋岸ではないため、地震も津波もさほどの影響を受けなかった北塩原村ではある。

<sup>15</sup> 1995「中学校社会科地図」東京：帝国書院

<sup>16</sup> 藤岡和賀夫(2006)「残したいね日本の風景」東京：宣伝会議

<sup>17</sup> 里山：人里近くにあり手入れされている山。最近、環境破壊をもたらすゴルフ場やリゾート施設の開発から里山の自然を守る運動が里山トラストという形で広く行われている。具体的には建設予定地の立木を買い取ったり、生産物の所有者になったりする[株式会社有斐閣 有斐閣経済辞典第4版]

しかし、原発事故の深刻な影響は、この小さな山村にも及んでいて、北塩原村のHP<sup>18</sup>によると、村立の小学校・中学校では、放射線モニタリング等実施されているし、農地の土壌における放射性物質の測定結果も毎日更新されている。

痛々しい現実である。

司馬遼太郎が「街道をゆく」で訪れた旧石巻ハリストス正教会は、ロシア正教の教会である。

ハリストスというのは、ロシア語発音でいうキリストのことである。この音でいう場合、その教会がカトリックでもプロテスタントでもなく、ロシア正教（ギリシア正教）であると考えていい。(p. 270)

江戸期から明治初年にかけて、奥州の大港として栄えた石巻へ、東京から神父がやってきてロシア正教の教会を建てたという。ロシア正教は、明治維新前の安政6年、1859年に開港した函館に、ロシア領事館が設立された時に、日本に上陸し、現在、函館教会や東京の「ニコライ堂<sup>19</sup>」がある。

石巻市のHP<sup>20</sup>によると、

旧石巻ハリストス正教会教会堂は明治13年（1880年）、石巻市千石町に建設されたもので、現存する木造教会堂建築としては日本最古級のもので、昭和53年の宮城県沖地震で被災したものの、「文化財として保存を」という市民の声により、現在地に移築・復元され、昭和55年に石巻市の指定文化財となっています。文化財保護思想の啓蒙・啓発のため、平成13年7月23日から、通年で一般公開されています。

現在は、文化財として移築・復元されていると云うが、写真をみる限り「西洋の教会とも、日本の城の櫓ともつかぬ不思議な折衷建造物」(p. 274)と司馬は云う。明治の頃の地元の大工が、見よう見まねで建てたものらしい。「石巻はいいところですね」(p. 274)

私は、東北にハイカラさを感じつづけてきたが、そういう思いを形にすればこれではあるまいかとも思えてくるのである。(pp. 274-275)

しかし、宮城県沖地震で被災し、現在地に移築・復元されたこのロシア正教会は、3月11日の震災により、再び大きく破損したとHPが伝えている。数奇な運命と云う他はない。

東北地方だけに、人間の生活と共存する美しい自然と、日本の歴史を静かに語る文化遺産があるわけではない。関西にも、九州にも、たくさんの自然と歴史が残されている。

---

<sup>18</sup> <http://www.vill.kitashiobara.fukushima.jp/gyosei/jishin.html>

<sup>19</sup>ニコライ - どう【ニコライ堂】東京都千代田区神田駿河台にある日本ハリストス正教会の中央本部。1891年（明治24）建立、1929年再建。東京復活大聖堂。ニコライ教会堂。【広辞苑第六版】

<sup>20</sup> <http://www.city.ishinomaki.lg.jp/ishistcult/bunka/harisutosu.jsp>

しかし、関西に暮らす私が、今までふれることのなかった東北の自然と歴史が、地震と津波と原発事故によって、乱暴に破壊されつつあるのを悼み、それらを育んできた人々の生活が蹂躪されているが忍びなく感じられるのである。

できるだけのことをしてあげたいと思うのである。(Saturday, April 9, 2011)

# 大震災から学んだ日本の将来

笠井 進

Department of Computer Sciences & Information Systems  
Salt Lake Community College

今回の東日本大震災は私達海外に住む日本人にとってもこれからの日本の将来に対する危機感を感じさせられるだけでなく、日本人であるということの意識、責任を再認識させられ出来事です。私達夫婦の住んでいるユタ州のソルトレークでも、地震が起こってからこの三週間間に地域の邦人、日系人が中心になって、毎週末 yard sale, bake sale, charity concert などを主催して募金活動を続けています。地元の人達もそれに快くこたえてくれて、予想以上の多額のお金が集まり参加者はとても喜んでいました。私達もこうした活動に参加することによって、新しく何人かの日本人の人達と知り合いになりました。こんなにも沢山の日本人がユタに住んで、それぞれの形で勉学に、仕事に、家庭作りに頑張っているんだな～と感じました。同時に皆、私達と同じように、この未曾有の災害からの祖国の復興の為にどんなに微力でも何か具体的な手助けをしなければという強い気持ちに駆られて行動していることにも気がつきました。アメリカの各地に住んでいる日本人の友人と Facebook、Mixi といった Social Network Media を通じて邦人がそれぞれの町で私達と同じようにそれぞれの救援募金活動に励んでいるのを知ることによって、感動し力づけられもしました。

先週末ユタ大学のコンサートホールでの邦人、日系人が中心になって企画した charity concert には 600 人以上の人が訪れ募金額が 2 万ドルにもなりました。そのコンサートの模様はユタ大 Film Study で卒業した Tsuyoshi 君という横浜出身の学生が撮ったビデオが YouTube で見られます。

<http://www.youtube.com/watch?v=mB5pFNXe3TQ>

ちなみにこのビデオのインタビューに出てくるお琴の演奏をした Kanako さんの実家は被害の大きかった岩手県の宮古市だけにより今度の震災が身近なものに感じられました。はかまを穿いて篠笛を演奏した Matt 君はユタ大の Asian Studies の学生で昨年関西学院大学に留学した髓の日本文化オタクです。他に知り合いのなかには宮城や福島からの人もおり、はるか遠くの出来事とは思えられないのです。

この震災を機会に沢山の若者が援助復興の為に社会福祉活動に積極的に参加するようになることは非常にいいことだと思います。でも、私はそこだけで止まって欲しくはありません。今回の大震災にかかわる世界中からの関心、援助活動を見ているといかに世界がグローバルなものになっているか再認識しました。そうしたグローバルな世界で日本という国家が先進国として存続、発展していく為にこれからの日本の若者達が世界のいろいろな場所で英語を universal communication tool として勉学と仕事に取り組んでいくことがいかに大事かということです。私達夫婦はこの救援募金活動で日本のさまざまな

場所から、それぞれの理由、目的をもって留学、移住して来ている同胞が広大なアメリカの大地で祖国での悲惨時を悲しみ、将来を憂いながら一生懸命「英語の世界」で頑張っている姿を見てその思いがさらに強くなりました。

国際化の激しく進む世界の中で逆に受身的、内向的になっている日本の若者の将来をこの大震災がどう影響するか懸念していることは、最近の New York Times でも Sour Economy and Multiple New Crises Test Japan's Young というタイトルで載りました。

<http://www.nytimes.com/2011/04/01/world/asia/01youth.html?ref=asia>

英語を習得することは単に大学入試のため、海外旅行のため、一般教養のためだけではなく、真の Global Community の市民になる為の必要資格だと思います。(preaching to the choir だと感じられたら許して下さい。)

国家危機とも言える中で新学年を迎えられた e-dream-s の先生方の多大なチャレンジをお察しいたします。同時に、この国運の懸かった今これからますます英語教育を通じて日本の将来を背負う若者の Global Citizen への育成にご活躍されることを心から願っています。

【New York Times の記事】

## **Sour Economy and Multiple New Crises Test Japan's Young**

New York Times, April 1, 2011

April 1 is the traditional entrance day for incoming classes of new employees, who assume adult responsibilities and values along with the new suits and crisp white shirts that are the uniforms of corporate Japan. But they face a landscape as uncertain as any in their lives, with Japan's economy hobbled and its national pride bruised by the triple disasters of earthquake, tsunami and nuclear crisis.

Yo Miura had expected to enter a bank in the Sendai area, counting on a steady income and a modest amount of prestige. But his start date at the bank has been put off while northeastern Japan struggles to rebuild. "My life has completely changed," he said while sitting in the job office at Tohoku University in Sendai, his alma mater. "Before, my life was peaceful and predictable. Now, I'm not sure what the future holds."

While he awaits word from his employer, Mr. Miura plans to follow his friends' example and volunteer to help people rebuild their homes. Mr. Miura hopes that by fixing broken walls and retiling roofs, he can repair people's lives and bring deeper meaning to his own.

"So many houses are shattered, I will feel good helping out," he said.

While many of their elders wrote them off as too coddled to live up to traditional Japanese values of self-sacrifice and hard work, many young people are finding meaning in the crisis. Even before the earthquake, this generation was struggling with a sense of thwarted opportunities in a stagnant economy. With the erosion of the postwar compact that traded a slavish devotion to work for stable wages and benefits, many young people felt alienated. Legions of college

graduates, unable to land full-time jobs and eager to express their individuality, have drifted in and out of part-time work, a limbo-like existence that older generations find unfathomable.

Now some graduates, destined for corporate life, have found purpose volunteering to work at nonprofit groups shuttling aid to the newly destitute in the prefectures north of here. Students have taken to the streets to collect donations for those in need. Blogs and social networking sites are flooded with comments from young people asking what they can do to help.

“Before the earthquake, I thought about myself and what I can do for my new company,” said Miki Kamiyama, who just graduated from Meiji University and will start working at a small cable company in Yokohama on Friday. “But now I think what I can do for all of society.”

Among the hardest-hit are the new hires at Tokyo Electric Power Company, which owns the disabled nuclear power plants in Fukushima. Once one of Japan’s most prestigious companies, Tokyo Electric has become the target of anger and contempt, and some observers question whether it will need government aid.

Tokyo Electric, known as Tepco, is so consumed with shutting down its reactors in Fukushima that it is unlikely to have many free workers to train the 1,100 or so new hires that start work this week, and many new construction projects have been put off. Still, some new hires sense an opportunity to fix a broken company. “In a way, I feel fortunate that I will be on the front line to help the people and Japan’s society,” said one new entrant who asked that his name not be used so as not to alienate his employer. “I feel that people who work for companies like Tepco want to help in some way.”

The personal transformations are more subtle outside Iwate, Miyagi and Fukushima, the three prefectures that have suffered the most. Without obvious damage to fix, young people are instead grappling with a silent threat from radioactive particles, as well as rolling blackouts that have forced Japanese to do without many of the electronic gadgets that were their constant companions.

The larger question is whether these young adults will remain as committed and concerned as they appear to be now. Life in many Japanese companies, especially for new hires, can be all-consuming, leaving little time for sleep, let alone volunteer activities. Partners, spouses and children will have their own gravitational pull. And because people’s identities are so closely tied to the groups they are part of, social pressure may naturally lead them to narrow their circles to family, associates from work and friends from school.

“It’s premature to say what the impact of the earthquake and tsunami will be,” said Hiroshi Sakurai, who teaches sociology at the School of International Liberal Studies at Waseda University. “Japanese have gotten used to these things.” But a minority of young adults may continue to find meaning not just in the suffering they are seeing daily, but the outpouring of support for Japan from other countries.

That sense of interconnectedness has motivated Keiko Eda, a volunteer at Peace Winds Japan, a humanitarian relief organization in Tokyo. “Because of the earthquake, I think a lot of young people are clearly changing, including me,” she said. “We don’t recognize this as our normal lives anymore.”

For now, companies in Tokyo and elsewhere in Japan are adapting to the less-than-normal start of the fiscal year. Many of them have canceled the yearly ceremonies where executives greet new workers on their first day on the job. Moments

of silence are now the norm. Late-night drinking sessions with superiors that mix bonding and hazing are being shunned.

For now, people are continuing to search for ways they can help, large and small. Shota Kitanishi, a student at Kwansei Gakuin University in Nishinomiya, near Kobe, was 4 years old when the earthquake of 1995 destroyed parts of the city. He grew up watching the city being rebuilt.

In solidarity, he is asking other students to pledge about \$12 a month for 12 months and send the money to aid groups helping victims in northeastern Japan.

“You just can’t think of the disaster as someone else’s disaster,” he said. “We’re all Japanese. When you get together, you feel like you can do anything.”

Hiroko Tabuchi, Ken Ijichi and Moshe Komata contributed reporting.

# 生物多様性と会議

塚本美紀

今の学校に転勤して以来、春休みは一年のうちで一番忙しい。私の学校は単位制の学校で、大学のように生徒一人ひとりがそれぞれの時間割を作ることになっている。とはいえ、必修科目はどれとどれで、この講座はあの講座を履修した後にしか受講できないとか、いろんなルールを理解して時間割を作るのは、中学校を卒業したばかりの新入生にとっては難しい。そこで、合格が決まった 250 人の新入生に、春休みに来てもらって、一人ひとり面談をし、話し合いながら時間割を作っていく。作った時間割が、文部科学省の定める高校卒業に必要な条件を満たしているかとか、生徒の進路希望に適しているかとか、仕事を持っている生徒は仕事との両立は可能かとか、生徒の実力と進路希望を考えるとどのレベルの講座を受講するのが適切かとか、いろんな点から複数の教員でチェックするので、手間も時間もかかる。正直言うと、たまにうんざりすることもある。とはいえ、このシステムのお陰で、持病がありながら自分のペースで勉強できたり、家族を経済的に支えながら高校を卒業することができたり、得意な分野を十分伸ばし希望の進路を実現させた生徒はたくさんいる。多様な人がいる社会の方が、きっと変化に強い社会だと思うので、地域に一つくらいこんな学校があってもいいと思うので、この春休みの煩雑さも我慢できるし、いろんな生徒に対応することも苦にならない。

生徒に対してはずいぶん寛容になったと思うが、上司や同僚に対してはどうだろうかと考えてみる。どうしてそんな考え方しかできないのかなあ、もっと効率的にできるのになあ、などと口に出して言うことは少ないが、心の中で思うことは時々ある。いろんなことを決めていかなければならないこの時期は余計にそうだ。効果的に仕事を進めたいと思うからこそそう思うのだが、それは自分の独りよがりで見方ではないのかという視点を常に持っていなければと思う。いろんな生徒を受け入れているのだから、教員にもいろんな人がいてもいいし、そんな余裕の中からもいろんなアイデアが生まれ、強い集団になれるのだと思う。そもそも、他の人から見たら「普通」ではないかもしれない私自身も受け入れてもらいたい。生物の多様性が尊重されるように、「人」の多様性も認められるべきなのだと思う。次に会議でいららしそうになったら、生物多様性の宝庫であるアマゾンの豊かなジャングルを思い出そうと思う。



# 転 勤

理事 山田昌子

思いがけず、12年間勤務した府立高校を離れ、4月から新しい学校で勤務することになった。母校であり、またこれまでで一番長く勤務した学校だったので、思い出が多い。英語コースのシンガポール研修旅行や国際交流プログラム作成等、担任として、一から企画・実施するという貴重な経験をさせていただいた。また、やんちゃな生徒が多く、特別指導のない日がなく、苦慮することもあった。様々な出来事が、次々と頭によぎる。が、今となっては、なつかしい。

新たな勤務校は、生徒は比較的大人しく、学力が大変高いというわけではないが、進学する生徒がほとんどで、大学入試対策に力をいれている学校だ。生徒指導上の問題事象は、昨年度5件と少なく、生徒たちの制服姿を見るだけでも、前任校と異なる。私は、過去にも落ち着いた学校で勤務したことがあるのに、まだ、前任校との大きな相違にとまどっている。

「とまどっている」と言いながら、私は、ふと、転勤したにもかかわらず、切り替えが出来ず、いつまでも前任校にこだわっているのではないかと思った。新たな勤務に常に違和感を感じ、後ろばかり振り返り、足踏みをしているのではないかと気づいた。新しい環境に身を置くことにより、気持ちを入れ替え、自分を変え、新しい自分に出会えることができる ---- 転勤こそ、大きなチャンスのはずだ！

通勤は、これまで車で5分だったのが、40分と増えた。「源氏物語」で有名な「宇治十帖」の舞台である宇治橋周辺を通る。交通量が多いが、橋から見える風景は、毎朝、毎夕変わる。4月当初は、朝寒く、灰色の空に灰色の山々、灰色の川面だったのが、1週間で、川縁の桜並木は見頃となり、薄桃色がパッと周りを明るくしてくれた。毎日少しずつ気持ちを変え、前向きになれば、新たな自分になれるかもしれない！

私の分掌は、図書部。新しい勤務校は、本離れする若者が多い中、京都府内で貸し出し冊数が上位、昨年度は1万冊を超えた。週1回府立図書館から巡回車が来る。また、何年もパソコンやバーコードを使って図書の貸し出し・返却をしてきた。春休みに借りた本を返しにきた生徒達は、既にこのシステムに慣れている。私は、私にとっての新しいおもちゃを使い返却作業をしながら、手あかがついている返却された本1冊1冊をみつめた。その本を読んでいる生徒たちの顔が浮かんでくるような錯覚を覚えた。返却後、新たな本を借りていく生徒もいて、新学期初日から賑やかな図書館だった。

転勤当初は「この学校では・・・」と突き放して言うことが多かったが、1週間過ぎた今「うちの学校では・・・」と言い始めている自分を発見した。とまどいながらも、少しずつ慣れ始めているのかもしれない。前を向いて、一步一步進んでいきたい。

<編集後記>

3・11 東日本大震災から1か月、多くの日本人が「今私にできること」を考え行動しています。同時に、多くの人がこの援助活動が一過性のものであってはならないとも考えています。忘れられることは絶望につながりますが、想像し活動を続けている人がいることは希望につながります。

e-dream-s の活動として新たなプロジェクトが提案されています。他にできることはないだろうかと会員の皆さんの知恵と力を集め、想いを実現させていきましょう。(道面 和枝)